

往々にして太夫の頭に、「切」とか「中」とか「奥」とか細字で書いてあるのを、讀者は見出されるだらうが、これは一段のうちを、尙區切つて語ります時の語り場所を示したものです。が、「中」とか「切」とかあるうち「切」といふのは、序切、二段目の切、三段目の切、四段目の切とはいへませんが、この四ツの語り場以外は、決して「切」とは申しません、「奥」といひます。番付面に「切」と書かずに「奥」とあるのは、即ち「立端場」の最後の語り場で、こゝは「切」ではなく「奥」というて、「立端場」であることを明示してあります。

今一つの實例で申しますと、「菅原」でいふと、大序があつて、「道明寺」が二段目です。「トツテンコウ」が立端場で、「茶筌酒」が同じく端場、「櫻丸の切腹」が三段目の切、「寺子屋」が四段目です。と、道明寺、櫻丸、寺小屋の最後の語り場は「切」ですが、「トツテンコウ」の最後の語り場は「奥」と申すのが法則になるのです。

三、番付の讀方

——太夫の部(二)——

人形淨るりの狂言の立て方の變遷は、前回到述べましたが、要するに昔は新作が主で、興行毎に新し

い趣向で客を呼んだ。段々後世になつて新作にいゝものが出來ない。これにはいろ／＼の原因がありませうが、作者といふよりも、曲節の創作者がなくなつた。且つ淨るり界にも資産が出來た。ストックが出來たものですから、昔からのストックのうちからの當り狂言を選んで、前狂言の次に据ゑた。前狂言中狂言、次狂言、切狂言、大切道行などと、人の耳にあるもので、當りをとつたものを繰返へすやうになつた。これが即ち「付け物」の起りでありませう。歌舞伎の世界も同じことで、この頃では、時として中幕風のものばかりで一日の狂言が立てられてゐます。世帯が古くなるとこの傾向が免がれません。で、「付け物」が多くなる。言葉を換へると、淨るりでは三段目物、四段目物が、「付け物」の形をとつて現はれてくることが多い事になります。

この「付け物」が、また太夫、三味線の目のつけどころで、立てた通しの前狂言では、三段目四段目がさう多くあるわけがないから、先進の人々に語り場を塞がれてゐますから、我れと思はんものは「付け物」に出たがる。「付け物」で腕を——否、のどを聴かさうとします。

この「付け物」を語る太夫は、人氣のある太夫か、位置の定つた呼び物になる人とかが語ります。ところで、素人淨るりで、玄人を凌ぐやうなのが商賣の太夫になつたりした時に、往々にしてこの「付け物」を語ることがある。これを「化物」と申します。

最後の文樂座において、「ばけ物」の例は多くはありません。それといふのは、昔は素人義太夫が盛んでしたから、素人でなく、の金太郎が多い。只の金太郎ではありません。腕の冴えた玄人を凌ぐ金太郎が多かつたから、「ばけ物」が多かつたのです。別項にお話しをした灘安といふ酒屋の旦那の柳適太夫（二代目）の如き、竹本呂太夫の如き、もつと近くは錦太夫の例がそれですが、近時は素人にもいゝのがないから、「ばけ物」も當節は餘ンまり出ません。最近で「ばけ物」の例をいふと、昭和二年四月二日初日の——即ち、道頓堀の辨天座を假宅興行とした文樂座の四月興行の切に「梅忠冥途の飛脚」で、「淡路町」を語つた竹本貴鳳太夫が、「ばけ物」の近い例です。これは砂糖屋の旦那で、先代からの素人義太夫の尤です。先代の貴鳳は、貴鳳貴若といつて、明治の中葉に鳴した素人義太夫の名人でした。その名人の息子の貴鳳が、貴鳳太夫と玄人の太夫になり、竹本津太夫の弟子となつて文樂座の床（とこ）を商賣人として踏んだのです。

又、別項の「名人團平と壺坂」の條に掲げましたくだりを御覽下さい。このときの切狂言が「みづえげんじ亭源氏」で伏見の里が出ました。これが「付け物」で、この時の竹本春子太夫——ついこの間、近松座限り舞臺を引いて下駄屋をして死んだ春子太夫が、即ち「付け物」を語つたのです。その位置にあらすして拔擢の意味で語らしてみた「付け物」の伏見の里。即ちこれを「ばけ物」とはいへませんが、これらが拔擢

の尤なるもので、「準ばけ物」とでも申しませうか。この春子の三味線は現在文樂座で鍛^{じやうだん}太夫を弾いてゐる豊澤新左衛門で、春子を弾いてゐたこの明治三十一年は、新左衛門は松三郎といつて名人團平に師事してゐた。そしてこの「伏見の里」が春子のために、拔擢の「付け物」であり、松三郎のためにもさうであつた。この興行から松三郎は、二代目新左衛門を襲名し、この「伏見の里」の「弾出し」を團平が工風をして一流の「弾出し」を作つて新左衛門に與へ、その死ぬ朝、新左衛門のために舞臺裏で稽古を付けたのでした。この「弾出し」が團平最後の節付となりました。

話がそれからそれへと枝葉になりますが、此の「弾出し」といふことについて、一寸説明を加へておく。——つまり淨るりを語り出す前弾きを「弾出し」といふのです。この「伏見の里」を語り出す前に弾く三味線を従來の三味線の手を換へて、團平が新たに修正したのです。元來三味線の手は定つてはるますが、ちよい／＼その人々によつての工風がある。名人團平の如きは、「節」には關係しないで、三味線の「手」としては、一日として同じものを弾いたことがないといはれるほど、一生を工夫に生き、工風に死んだ人ですが、「弾出し」になると太夫の節とは、關係が薄いから、大抵新たに修正を加へたのが團平の平常です。これを専門的にいふと「伏見の里」の場合では、従來の「弾出し」を修正して、「雪」と「入相」の手を融合して新しい「伏見の里」の「弾出し」を作つたといふことなのです。

で、「付け物」の話に戻りまして、今一例をいふと、明治二十九年一月二日初日で、同じく稻荷座で、竹本伊達太夫今の土佐太夫が、異例の「付け物」を語つてゐます。この時の紋下は、竹本彌太夫、三味線では豊澤團平といふ顔ぶれで、當時の伊達太夫は師匠の大隅太夫なり團平の眼鏡で、「付け物」として「山名屋」を語りましたが、當時の伊達太夫はまだ序切にも行かない、「大序の人」ですから——即ち大序で修業中の人ですから、「付け物」を語るとなると座内の苦情があつた。故に「付け物」は語るが伊達太夫の位置は大序に在るといふ條件、即ち「大序」に伊達太夫の名を存しておいて、且つ「付け物」の山名屋に出たといふ一つの例を残してゐます。

素人から玄人に入つたほんとの言葉の意味の「ばけ物」では、前にも述べたやうに古く呂太夫、柳適太夫などは「ばけ物」の尤なるものでせう。錦太夫が「ばけ物」でしたが、期待にはづれて今日では文字通りの「ばけ物」で、眞の義太夫からは遠ざかつた藝になりました。さて團平が舞臺で死んだ時の番付を御覽になつて御心づきの點は、「庵」の位置に組太夫と大隅太夫(三代)との二人があることです。この時の紋下は彌太夫が古老といふ顔で紋下に坐つてゐますから、紋下の資格ではあるがといふので、現今の土佐太夫のソレの如くに、組、大隅の兩太夫が二人まで「庵」に入つたのです。

曩きに「大序」の人といふことを申しましたが、太夫が修業中は「大序」をみす、内で語つてゐるので

す。昔ならば朝の六時からお客が一人もゐなくても、みす内みすうちで修業のために語つてゐた。これが稽古なのです。太夫の白湯を汲むとか、床の衝立裏で稽古本に見入つて師匠の語つてゐるのをデット聴いてゐる。この外に師匠に就ても、稽古らしい稽古といふものは決してなかつた。自得するのが斯道の稽古です。内弟子となつても見臺の前へ坐つて稽古するなどは、決してなかつた。たまさか、酒の間に藝談を聴くことが關の山です。つまり内弟子は無給の丁稚男衆です。といつたのが修業で、「大序」をみす内みすうちで語るのが唯一の稽古ですから、太夫は弟子の聲など聴いたこともないといふのがこの道の常道です。

で、序の口、序中が語りすゝんで序切を語れば、もう實は一かどの太夫といつていゝ。——昔はですそして、この「大序」を抜けると、もうその位置がハッキリとしてきます。この「大序」にゐるうちが「大序」の人といふのです。このみす内みすうちが段々廢つて、今日ではみす内みすうちで大序の人は語らぬ。時間に責立てられてみす内みすうちの稽古は全くないといつていゝのです。

例へば今度——この十月一日(昭和三年)から文樂座は辨天座の假興行で、一度二部制をとりました。この制度は筆者が、大正十五年の秋に大阪毎日新聞その他において極力唱道しましたが、當事者は願みようともしなかつたのが、二年目の今日これが實行を見たのは私としては欣幸とするが、これは私の先見の明があると誇るわけでなく、岡目八目で、改革の實行方法は當事者よりも、他の外部の者がよく見

える。當事者は知つてゐても實行されぬ。それが「時」の力には抗することが出来ず、たうとう私の説の二部制を採用したが、その結果は、今こゝで語らうとする「大序」の人の修業時間を盡く奪つてしまつた形になつた。その番付を見ると分るやうに、二部制第一次の夜の部の番付の「太夫の部」だけを使宜上切離して考へますが、こゝに「淺草雷門のどん」とある下に細字の太夫が「豊竹宮太夫」以下十九名を連ねてゐますが、これは番付面だけで、みす内でも語る時間を持たないで、夜の部が初まる文字太夫の「雷門の奥」が開幕第一であるといふ體裁です。宮太夫以下十九名の位置は「大序」の人々です。

とにかく大序は修業です。ところが昔は決して大序たりとも唯の修業ばかりでない、一日の狂言の大切なのは大序であるといふ見地から、責任のある太夫が、大序と三段目とを語つてゐる。例へば前々回に申した享保十八年と推定の古番付を御覽になつても判るやうに、この時の「重井筒」の責任者である竹本政太夫が、大序に當る上の巻と三段目に該當する中の巻の切とを二段語つてゐます。この風が段々後世になるに従つて廢たりしましたが、團平(二代)の如きは、「忠臣藏」の大序は大事な語り場であるといふ見地から、必ず自らその三味線を弾いた。だから團平に引ずられて大隅太夫なりそれ〴〵紋下格の太夫が「忠臣藏」の大序を語つてゐますが、この形式を残した「忠臣藏」の大序すら、今日では所謂「大

序」の人々の持場とのみなつてしまひました。

「付け物」或は「ばけ物」の事について述べましたが、この「ばけ物」の権輿を歴史的に見ますと、二代竹本義太夫即ち後の播磨少掾が、「ばけ物」の元祖だらうと私は思ふ。固より天王寺の百姓から身を起した初代義太夫、この道の流祖も「ばけ物」でしたらうがそれでは限りがない。歴史的に遡つた「ばけ物」は播磨少掾の政太夫が淨るり道の第一次の「ばけ物」だ。彼は大阪島の内三津寺町中紅屋長右衛門といふ町人、素人淨るりの群に入つた。その技を見込んで正徳二年三月四日初日の竹本座で、初代義太夫が「傾城懸物揃」を語つた時に、切に政太夫が「丹波與作」を語つてゐます。これが明かに「ばけ物」であつた。そしてこれが「化け物」の元祖だと私は斷ずる。

今口繪番付をよく見るとお分りになる如く、三味線は番付の上欄の半ばをとつて、三味線だけでその位置が判るやうになつてゐますが、この三味線欄から引離されて、寫眞にある通り津太夫の隣りに、「鶴澤綱造」があり大隅太夫の隣りに道八があります。これは大して意味があることでなく、この場合、綱造なり道八が「顔」と「藝」とを斟酌して三味線欄に入れると、どうにも他との權衡がとれぬ。あつちこつちでさゝはりがありますから、據處なく欄外に出してその太夫の傍に女房役ですから太夫に添つて坐つてゐるわけです。

これをもて相撲のソレの如くに、勝負がハッキリしませぬから、「顔」と「鬚」とが常に位置を作る上に、二つの標準をなすわけです。「顔」とは申すまでもなく、その業に入つた年數を指すのです。つまり「年功」と「腕」との二標準が常に絡むわけです。

そして綱造、道八の上には「三味線」の三字がありますが、時にはこの三字を缺くことがあります。これは單に「顔」の上下で、缺く時は新進の三味線、異數の出世をした人ですが、「年功」が足らぬから、「三味線」の三字が書かないのです。

「大序」の人は「みす内」で語ると申しましたが、古來の慣例として、ある端場は必ずみす内みすうちで語るものだと極つてゐる端場があります。實例でいふと「菅原」の寺子屋は四段目ですが、この端場である「寺入」は必ずみす内みすうちで語るものです。これを「忠臣藏」で例をとると三段目の「進物」四段目の「あけ渡し」五段目の「濡れ合羽」九段目の「雪こかし」などは必ずみす内みすうちで語るのが古例です。

今一つ太夫の方の言葉に「小あげ」といふことがあります。「小あげ」とはどんな語り場かといふと、一言にしていへば「端場はなばた」の前が「小あげ」です。實例でいふと「朝顔」の笑ひ藥は立端場であるが、その前の遊仙のくだりが「小あげ」です。「忠臣藏」でいふと「身賣り」は立端場で、その前が「小あげ」といひます。